

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00102

研究課題名（和文）「モダンダンス」と近代東アジアの文化的・身体的越境

研究課題名（英文）Modern Dance and Cultural-bodily Border-crossing in Modern East Asia

研究代表者

イ ヨンスク（LEE, Yeounsuk）

一橋大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：00232108

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本を代表する舞踊家石井漠と石井漠の弟子である崔承喜の芸術活動と足跡を追うことによって、近代東アジアにおける越境する身体的美学がナショナル/トランスナショナルの問題系とどのように相応しているかを考察した。本研究の主な成果は、次の二点である。まず日本のモダンダンスと朝鮮のモダンダンスの成立と受容のプロセスを究明することによって、文化的ヘゲモニーは必ずしも政治的力によって決定されることではないことを明らかにした。また日韓のモダンダンスにはそれぞれの〈民族美学〉が敷かれていて、身体的越境は〈民族美学〉と響きあいながら行うことを具体的な事例研究を通して考察したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のもっとも重要な学術的意義は、学際的な研究であることである。これまで学際的研究の大切さは強調されてきたが、〈身体〉と〈歴史・社会〉そして〈美学〉をむすぶ研究は少なかった。本研究は、モダンダンスを軸に近代東アジアの身体的越境/政治的ヒエラルキーとヘゲモニーの関係を具体的な事例研究で明らかにした。また日本、韓国、欧米の学会で研究成果を発表することによって、今後さらに国際的研究の可能性を広げることができた。

研究成果の概要（英文）：By tracing the performance activities of dancer Ishii Baku, a representative dancer in modern Japan, as well as of dancer Ch'oi Sunghi, who was an Ishii's student, the current research has explored how the border-crossing aesthetics of body was related to the dynamics of international and transnational issues in modern East Asia to 1945. The key findings of this research are twofold. (1) It is found that by examining the processes involving the introduction and reception of modern dance in Japan and in Colonial Korea, cultural hegemony was not necessarily determined by political power. (2) Through analyzing specific examples, it is also found that the modern dance of Japan and Korea was embedded in the respective "ethnic aesthetics" of their own in one manner or another and, in a similar vein, the border-crossing body was resonated with their own

"ethnic aesthetics."

研究分野：文化研究

キーワード：モダンダンス 身体と近代 身体的越境

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで近代日本における天皇の詔勅の意味、近代日本における共同体主義とナショナリズムの関係、言語様式の観点からみた文化的越境の問題などを明らかにした。とくに、「近代日本における言語様式の重層性と文化的越境の研究」においては、言語だけでなく文学や芸術をも視野に入れ、文化研究的な方向付けを強めてきた。

また、国境を渡った知識人や芸術家の足跡を追うことで、近代日本において文化的越境が多様な意味をもっていたことを把握することができた。こうした一連の研究を通してわかってきたのは、生きた具体的な文化実践は、一義的なイデオロギーや思想に還元できるものではない。むしろ、そうした外在的な枠組みからはみ出す性格をもつ。東アジアの文化的越境は、政治的力のヒエラルキーでは、把握できない。現実の文化実践をよく見てみると、混質性や動態性に向かう方向を秘めていることがわかる。そうした問題意識をもって「モダンダンスと身体的越境」を多元的・複眼的にとらえようとするのが、研究開始当初に抱いていた問題意識である。具体的な研究対象は、近代日本を代表する舞踊家石井漠(1886-1962)、そして石井漠の弟子である朝鮮の崔承喜(1921-1969)と台湾の蔡瑞月(1921-2005)三人の舞踊家の芸術活動と足跡を詳細に追うことである。

2. 研究の目的

東アジアの近代は、帝国主義と植民地主義の形成と衝突のプロセスの中で展開してきた。そのゆえに、近代東アジアに関する多くの研究は、歴史的・政治的なことに注目されることが多かった。またそのような研究テーマの研究成果も豊富である。したがって、文化研究も、そのプロセスと実態が政治的ディスコースやイデオロギーの中に回収されることが多かった。本研究は、これまでの近代東アジアの研究の全体状況を俯瞰したのちに、まずは近代東アジアの歴史的・社会的文脈をしっかりと凝視する。そして具体的な文化実践を考察することによって、近代東アジアにおける文化的越境の様相を身体美学と現実態の相互作用の角度から、複眼的に考察することを目的とする。これまでの先行研究を綿密に検討し、「文化的越境」と「身体性」という視点を取り入れて斬新な近代東アジアの文化研究の地平を切り開くことを目的にする。さらに人文学と舞踊研究の学際的研究を通じて、学際的研究の可能性と重要性を具体的に示すことである。また個別のネーション中心の閉じた研究の軸に柔軟性を与え、ネーションの空間が重ね合い、ネーションの間の断層、隙間などを浮き彫りにすることである。ナショナルな枠組みへの統合とそこから離脱という視点を見出すことによって、真の意味の国際研究が可能になるとと思われる。

3. 研究の方法

本研究では文献資料とフィールドワークを併行する。

文献資料は、刊行物だけでなく、未刊行・未公開の資料を積極的に発掘し利用していく。三人の舞踊家だけに焦点を定めるのではなく、ひとつのテーマに関係する複数の文化人と文化空間を常に比較対照することによって、テーマ系そのものの意味の変化を追及するという方法を取る。時代的には、近代日本を網羅的に概括するのではなく、顕著な特徴が出現した時期、あるいは新たな文化・社会の枠組みが出現した時期に焦点を定める。

重視するのは、文化的越境について、モダニズムと伝統的芸能との関係を重視する。日本の内部のモダニズムに基づくモダンダンスが、外部において共振するに至った過程を取り上げる。こうした方法を取ることで、それぞれの現象の根底にある、伝統的美学とモダニティの対あり方の類似点と相違点を理解することができる。

4. 研究成果

2019年度は、とりわけ1920年代から1930年代半ばまでを中心に、東アジアにどのように近代舞踊が受容されたかを明らかにすることを中心に研究を進めた。まず朝鮮での伝統的踊りと植民地期に日本を経由して入った近代舞踊との相関関係を考察した。その成果は、2019年12月にHitotsubashi Journal of Arts and Sciences (issn 0073-2788 No.1(Whole Number 60) December 2019)に英語の論文「The Transition of the Monk's Dance (Sungmu) from Ritual Dance to Folk Art in Modern Korea to 1945」として出版した。また台湾と日本の舞踊に関する資料調査は、2019年10月30日から11月4日まで台北で開催した「第14回蔡瑞月国際舞踊フェスティバル」にコメンテーターとして参加し、貴重な資料を収集した。蔡瑞月国際舞踊フ

フェスティバルには世界諸国から、舞踊家が参加していたが、日本から参加した石井漠舞踊研究所の方々にインタビューをした。蔡瑞月舞踊研究所では蔡瑞月に関する聞き取り調査と資料を収集することができた。

2020年度は国立国会図書館、韓国のソウル大学、延世大学、台湾の台湾国立大学、中央研究院などで所蔵されている資料を徹底的な探索と精読とともに、民間に知られている未刊行・未公開の資料を積極的に発掘していく予定だったが、コロナの影響で海外渡航ができなかったために、新しい資料の発掘までは到らなかった。2020年度は主に文献研究に集中した。その中で、踊りを民俗と宗教から考察する新しい学際的視点を発見することができた。2020年度研究実績として2020年10月22日に国際学会 the 10th World Congress of Korean Studiesで、(ZOOM) “The Cultural Dynamics of Sapluri Dance in Transition from Religious Ritual to Stage Art in the Late Nineteenth to Early Twentieth Centuries” の研究成果を発表した。

。2021年度は国立国会図書館、韓国のソウル大学、延世大学、台湾の台湾国立大学、中央研究院などで所蔵されている資料と、民間に知られている未刊行・未公開の資料を調べる予定だったが、コロナの影響で海外渡航ができなかったために、新しい資料の発掘までは到らなかった。しかし、芸術史、文化史を精読することで、民族美学から本研究を捉え直すことができた。その成果は、2回にわたる国際シンポジウムで発表した。2021年10月15日に中国の南京大学主催の中国、日本、韓国の国際シンポジウムで、Keynote Speakeを行った。また、2022年1月には韓国の全州大学主催の国際シンポジウム(日本、中国、韓国) <近代国家の身体管理と儒教的身体>で、<東アジアの踊りと近代>のテーマで発表を行った。そして、2021年12月に『Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences (Vol.62)』に、論文「Ethno-Aesthetics and Engagement」を掲載した。

2022年度は、コロナの影響も多少改善され、2021年度よりは資料調査のための海外渡航も容易な状況となった。しかし、渡航先は主に韓国で、本研究の当初計画していた資料調査地の一つである台湾は規制が厳しいため、渡航することができなかった。崔承喜に関する資料を調べる中で、モダンダンスは民族美学と深い関わりあることがわかった。そのような視点で、石井漠についての研究も日本の民族美学のコンテクストから研究を進めた。2022年度の研究成果は、2022年9月29日に Wongkang University の東北アジア人文社会研究所で「石井漠と植民地朝鮮 - 囚われ人を中心に」というタイトルで講演し、論文を発表した。また2023年3月のボストンで開かれたアジア学会で<The Vitality of Korean Aesthetics in Clothing, Folk Paintings, and Localized White Porcelain>のセッションで発表した。

2023年度の研究成果は、2023年6月にデンマークで開かれた 31st AKSE Conference で<The Culture of Street Entertainment and a Space of Liberation for the Ruled in Late Choson Korea>について発表を行った。また2023年8月にカナダのUBCの国際シンポジウムで<朝鮮の民族踊りと民族美学>について発表をした。

そのほか、論文と研究成果にはまだ至らなかったが、東アジアのモダンダンスと<民族美学>の断絶と継承を考察することができた。ソウル大学の名誉教授である故李愛珠先生(2021年に亡くなった)とのインタビューから多くの示唆と新鮮なインスピレーションをいただいた。いずれ研究論文として発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Lee Yeounsuk	4. 巻 41
2. 論文標題 植民地朝鮮と石井漢一囚われ人を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 NEAD コロキューム論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Lee Yeounsuk	4. 巻 62
2. 論文標題 Ethno-Aesthetics and Engagement	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yeounsuk Lee	4. 巻 60（1）
2. 論文標題 The Transition of the Monk`s Dance (Sungmu)from Ritual Dance to Folk Art in Modern Korea to 1945	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Hitotsubashu Journal of ARTS and SCIENCES	6. 最初と最後の頁 15- 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 6件/うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Yeounsuk Lee
2. 発表標題 朝鮮の民族踊りと民族美学
3. 学会等名 A special seminar on East Asian Culture（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yeounsuk Lee
2. 発表標題 The Culture of Street Entertainment and a Space of Liberation for the Ruled in Late Choson Korea
3. 学会等名 31st AKSE Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 イ・ヨンスク (Lee Yeounsuk)
2. 発表標題 石井漢と植民地朝鮮
3. 学会等名 東北アジア人文社会研究所 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 イ・ヨンスク (Lee Yeounsuk)
2. 発表標題 The Vitality of Korean Aesthetics in Clothing, Folk Paintings, and Localized White Porcelain
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 イ・ヨンスク (Lee Yeounsuk)
2. 発表標題 民族美学とアンガージュマン
3. 学会等名 東アジア文学と文化 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 イ・ヨンスク (Lee Yeounsuk)
2. 発表標題 近代的身体と芸術
3. 学会等名 アジア文化(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yeounsuk ,LEE
2. 発表標題 “ The Cultural Dynamics of Sapluri Dance in Transition from Religious Ritual to Stage Art in the Late Nineteenth to Early Twentieth Centuries ”
3. 学会等名 The 10th World Congress of Korean Studies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 イ ヨンスク
2. 発表標題 東アジアにおける植民地文化支配とそのアイロニ
3. 学会等名 東アジア知識人文学国際学術大会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 イ ヨンスク
2. 発表標題 植民地の言語・文化/ディアスポラの言語・文化
3. 学会等名 社会変革と言語・文化国際学術大会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 イ・ヨンスク
2. 発表標題 越境する身体と文化
3. 学会等名 人文韓国学国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 金石範（著）イ・ヨンスク（監修）姜信子（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 424
3. 書名 金石範評論集 文学・言語論 1	

1. 著者名 金石範（著）イ・ヨンスク（監修）姜信子（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 560
3. 書名 金石範評論集 思想・歴史論 2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

韓国	ソウル大学	延世大学		
中国	南京大学	延边大学		
カナダ	the university of british columbia			